

令和元年度 第4回さいたま市幼児教育指針等策定部会 協議概要

- 1 日時 令和元年10月24日(木)
- 2 会場 さいたま市役所 地下第1会議室
- 3 出席者

委員

(6名)

小田倉 泉/部会長

井上 里香

大森 明子

天野 広行

杉田 二枝

和久井 伸彦

事務局

(7名)

三村 悟 子ども未来局幼児未来部 参事

角田 誠 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 主幹

遠藤 悟史 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 主査

鯨井 幹夫 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 主査

富山 幸子 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 主査

坪井 瞳 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 幼児教育コーディネーター

安東英里佳 子ども未来局幼児未来部幼児政策課 幼児教育コーディネーター

4 配布資料

- ・次第 「令和元年度 第4回 さいたま市幼児教育指針等策定部会」
- ・さいたま市幼児教育の指針 修正案
- ・さいたま市幼児教育の指針 概要版 修正案
- ・さいたま市幼児教育・保育人材育成指標

5 主な議題と協議内容

- (1) 「さいたま市幼児教育の指針」の修正案について
- (2) 「さいたま市幼児教育・保育人材育成方針」の原案について

6 主な協議内容(要約)

- (1) 「さいたま市幼児教育の指針」の修正案について

①さいたま市の育てたい子ども像について(事務局からの説明)

- ア) さいたま市幼児教育のあり方検討会議を受けた、さいたま市の「幼児教育」についての捉え方についての説明(主に、対象年齢は出生から小学校就学までとすることを継承する)
- イ) 事務局から、修正案の送付及び、再修正の経緯説明
- ウ) 事務局案「あそびで育つ 輝くさいたまの子」の説明
- エ) 事務局案「育てたい子ども像のための4つの視点」の説明

- 1 「ありのままの自分で安心して生活する」：ゆったり
- 2 「健やかな体で安全・快適に生活する」：すくすく
- 3 「自主的・主体的に活動する」：わくわく
- 4 「自分なりの表現で人やものと関わる」：のびのび

小田倉：修正案を受けた事務局が、再度修正を加え提示した案について、説明があったが、いかがか。

井上：いろんな輝き方があるということが伝わってくる。育てたい子ども像について、読みやすくなった。一方で、その解説部分になると、難しい言葉なども出てくるので、伝わりやすい言葉にしたり、読んで納得できるようにしたりしてほしい。

小田倉：読みやすさも大事にしていきたい。ほかの御意見はいかがか。

小田倉：では、事務局案「あそびで育つ 輝くさいたまの子」で進めていくことでよろしいか。
(委員の了解)

小田倉：「あそびで育つ」の説明部分である、①「あそび」とは、②「学びの芽」とは、③「認知能力と非認知能力」、④遊びで育つ非認知能力の連続性、の記述内容やつながりの関係性が簡潔にわかるとよい。例えば、「あそび」で育つのが「学びの芽」だけなのかとも受け取られかねないからである。「あそび」の中に「学びの芽」があり、その中に「非認知能力」がある、といったような構造上の連続性がわかる内容にしてほしい。見やすいと、読みやすいので、全体的なレイアウトも今後、検討していき、見やすい仕上がりにしてほしい。

小田倉：次に、「育てたい子ども像のための4つの視点」について、うかがいます。

保育者に対しての行動指針として打ち出していく表現か、参照程度なのか、明確にしていくべきではないか。

井上：内容ではなく、表記の問題だが、1～4と通し番号をつけると、4つの視点に順位性は出てはしないか。どの視点もあくまで、それぞれ関連し合っているので、並列の関係性ではないか。

事務局：「ありのままの自分で安心して生活する」については、一番大事にしたかった養護の部分、とりわけ、生命の保持を含むので、先にもってきた。

小田倉：数字で表記しないほうが、いいのではないか。

天野：「すくすく」と「のびのび」は類義語なので、もし、職員間で話す場合、違いを伝えることが難しいかもしれない。それに代わる言葉はないか考えたい。

小田倉：「ゆったり」「すくすく」「わくわく」「のびのび」があることで、イメージとしてわかりやすくても、内容としては捉えにくくなってしまうのではないか。明瞭さに欠けてしまっは本来の意味が伝わらなくなってしまう。

事例のエピソードのページに図のような載せ方をしてはいかがか。

小田倉：次に、育てたい子ども像のための行動指針について、事務局から説明をお願いします。

(事務局から、育てたい子ども像のための行動指針についての説明)

小田倉：さいたま市内の幼稚園、保育園、認定こども園等がこれをもとにして質の高い保育を実践していくことができるようになることをねらいとしている。質の高さを確保していく視点、切り

口、人的・物的環境の表記の仕方、保育者が内容をどのように捉えるか、保育者にどのように伝えていくか、園でそうした立場のある委員として、実践可能かどうかなど、様々な視点で御意見いかがか。

大 森：子どもを見る視点と人的・物的環境の工夫と分かれていたので、とらえやすく読めた。

語尾の表記に注意しながら、どの視点についても、一貫性が保てるようにしてほしい。

小田倉：日々の保育で当たり前に行っていることを、この行動指針で示すことによって改めて見直せるようなものになっているか。当たり前のこととして通り過ぎてしまうものになってはいないか。さいたま市として示したという新鮮さというか、重要性を再認識する意識感じさせるものになっているか。「常識として実践している」と読み流されてしまうことはないか。

杉 田：子どものことを考えると、「ゆったり」などの言葉があると結びつけやすい。子どもがどのようなところで、どのような時に、「わくわく」するのかが読み取れる。こうした事例を通して、大人側が感じて気付いていかないと質の高い保育実践ができないのではないか。

小田倉：例えば、「ゆったり」であれば、視点として示されている言葉を例示された1つの姿として、確認できるのだという記載をしていくといいのではないか。どのような「ゆったり」なのか、文と写真と図で補足していくことで、「ゆったり」の意味が具体化されるように構成してほしい。

子どもを見る視点、人的環境、物的環境の3つの項目で構成されているかいかがか。

井 上：人的環境がよければ、子どもは育つと考える。人的環境つまり、保育者の存在がとても大きい。物的環境がそろっているからといって、いい保育ができるかという一概にそうとは言えない。また、事例の写真は、ぜひ子どもが輝いている写真を選んでほしい。また、全ての歳児の写真や事例が載るとよい。子どもの輝く姿を中心にした事例も入れてほしい。エピソードには、子どもの声や自主性で動く姿を載せ、そこに保育者がどう関わったかが、現場としては理解度が上がるのではないか。

小田倉：子どもを見る視点は、人的・物的環境と同列でよいのだろうか。視点があって、環境があるとすれば、表記の仕方を工夫したい。保育者の具体的な有り様が示されているといいのではないか。拘束力を感じてしまうものにせず、行動指針というので、具体的な有り様を積極的にだしてもよいのでは。行動指針であるならば、具体的に示すことが重要だ。どう行動していくのか示されているとよいのではないか。

子どもを見る視点が先で、人的・物的環境の工夫がその次に続くものにとらえてよいか。

事務局：子どもを見る視点が原点で、保育者がどう見るかで行動が、見方によってその後の具体的な行動が変わってくる。先に視点を上げその後に行動がくるものと考えている。

小田倉：子どもを見る視点が前提にあるのであれば、人的環境、物的環境はその後に続いていく表記にすれば、意味が伝わるのではないか。

天 野：事例がより身近で共感できるもの、手が届きそうな取組なものであるとよい。

右ページの事例は、どこの園の事例か。

事務局：本年度の公開保育研修会実施園のエピソードを使っている。各園でも、もし相応しいのであれば提供してほしい。

天 野：例として取り上げているエピソードが園によっては難しく見える場合もあるのではないか。1

歳児の食事で1対1で接するとなると、園の実情と差があるかもしれない。

小田倉：例示として挙げる場合、何をアピールしたいのか、それは実現可能なのか。といった視点で写真やエピソードを選定していきたい。

天野：取り組みやすい例示の方が、イメージが膨らむのだろうと思う。具体的に広がり、応用できる。

小田倉：共感しつつ、保育者が目指していけるエピソードがあるとよい。

和久井：部会を重ねるごとに、内容が専門的になってきた。小学校へ配布を予定しているとのことだが、小学校の学びにつながっていく項目や表記があるだけでも、小学校教員の目に留まり、保幼小のつながりが出てよいのではないかと。概要版は誰に渡すのを想定しているのか。保護者に見てもらふことも考えていくのであれば、園の説明会などでもさいたま市の目指す子ども像を浸透させ、活用していけるのではないかと。特に、概要版は、同じ意味を伝えつつも、写真やイラストなどで見やすさを重視してほしい。現段階のものは、文字が多い印象だ。

小田倉：専門的な言葉や難しさを感じる箇所について、例を挙げてみるとどうか。

和久井：ほとんどの内容が初めて見るようなものであろう。小学校教員は授業、学習について考えているので、内容の難しさというより、保育における実感や想像が付けにくいのではないかと。

小田倉：小学校や保護者も目にすることを考えると、保育に関する専門的な表現は概要版では、簡易にしていくようにしてほしい。

和久井：概要版が一般向けとするなら、難しい言葉やとっつきにくい内容であるのかもしれない。読みにくい文章が多い。誰に渡すのかによって、表し方は変わってくる。

小田倉：現時点では、概要版は指針の抜粋になっているので、言葉をさらに簡易する必要がある

事務局：本年度は冊子を園や小学校に配布するだけでなく、概要版は保育士に届ける。次年度にさらに保護者向けの概要版を簡易版として作り直すことは考えている。

井上：保護者向けがあつたら、子どもの育ちなどの理解につながると思う。

(2) 「さいたま市幼児教育・保育人材育成方針」の原案について

小田倉：「さいたま市幼児教育・保育人材育成方針」について、事務局から説明をお願いします。

(事務局から「さいたま市幼児教育・保育人材育成方針」についての説明)

小田倉：B案の縦軸は4つの視点からなる設定になっている。行動指針は、4つの視点を実現するためにどう行動するのか、保育者の姿が見えにくい。子どもの姿が描かれているB案で、どのように保育者の育成につながるか、それに向けた行動や有り様が見えにくい。

井上：子どもを育てる視点で項目立てたA案の方がわかりやすい。B案だと保育者の有り様が見えづらい。

小田倉：A案のキーワードをB案に入れ込むことも考えられる。一方で、保育実践力を1つとっても、4つすべてに関わってくるので、B案だと、さらに細分化されて書き込んでいくことになるのではないかと。A案は内容を網羅されているが、B案だと、さいたま市の示す行動指針に限定した保育者の資質のチェック項目になっていく印象を受ける。

和久井：B案がいいと思ったが、具体的に、どのようにキャリアと連動して指標が移っていくのか見えてこない。子どもの姿を示す項目だと、1年目とベテランに違いを書き表すことができるだろうか。保育者自身の資質であれば書き分けることはできそうなので、A案の方がいいのではないかと。

いか。ただ、4つの言葉は使いたい。研修と関連させるとより難しくはならないか。

小田倉：項目として挙げるのは厳しいかもしれない。5段階評価として、1つの項目に対して、自己評価して、自分がどう変わっていくかということもできるのではないか。

井 上：本人が自身の保育についてどう思っているのか、目標をもたせることは大切である。面談など数値化されたら自分と向き合う機会になる。自分のことを知ることは資質向上の1つである。どう達成されているか、振り返る材料として使うといいのではないか。保育者に目標をもって意識を高めて行ってほしい。段階的に、評価制にするのはどうか。自己評価が経験とともにどのように変わっていくか。

小田倉：実践力と大括りにしてしまうというと、何を指しているのかわかりづらい。行動指針で具体的なものを示すことで、自分を振り返りやすくなるものとして活用できたらいいのではないか。あくまで、誰かが評価するものではなく、自己評価として、この指標があるということによろしいか。

事務局：自分を振り返りやすくなるものとして活用し、将来的に指標となっていく、というような想定である。

事務局：これまでの意見で懸念されているところは、2つあり、1つは、アイデアはいいが、書き分けできるか。2つ目は、園で使う際にはっきりとわかりやすいものが見えやすいのではないか。次回の部会まで、中間的な案のやり取りを委員の皆様と行い、仕上げていくことでよろしいか。

(委員の了解)

7 備考

- ・傍聴人なし